

ニッポン 横浜こどもスポーツ新聞

世界トライアスロンパラシリーズ横浜大会

◇5月11日◇横浜・山下公園周辺特設コース◇男女エリート(スイム1.5km、バイク40km、ラン10km) 男女パラ(スイム0.75km、バイク20km、ラン5km)

エリート男子はニナー賢治(31歳NTT東日本・NTT西日本)が7位に入った。男子日本勢として14年の田山寛豪の7位以来、10年ぶりの入賞を果たした。エリート女子の高橋栞子(32歳相互物産)は48位、日本勢トップは佐藤優香(32歳トインパートナーズ、NTT東日本・NTT西日本、チームケンス)で44位だった。日本トリアスロン連合は5月30日に男子のニナーと小田倉真(30歳井住友海上)、女子の高橋をパリ五輪代表内定選手として発表した。パラ女子ではPTS4(運動機能障害)の谷真海(42歳サントリ)が5位に入った。なお、今大会では、こどもスポーツ記者を一般から募集、選ばれたこどもたちが大会の感想を寄せた。

【パリではメダル】ニナーが力強い走り。スイムを9位、バイクを先頭集団で終えるも、沿道からの声援にも乗ってランも踏ん張った。最後の周回こそ遅れたものの、一時は3位集団を引く健闘。3位から16秒を遅れてゴールすると、いいレースができた。世界のトップと戦えた満足そうに話した。オーストラリア人の父と日本人の母を持ち、オーストラリアで育った。21年4月に日本国籍を取得し、日本代表

として東京五輪に出場。14位の結果に「もっと上に行ける」と自身のレースを見直し、苦手だったランの強化など世界と戦う準備をした。パリ五輪選考に当たる今大会は「最も大事なレース」として臨んだ。直前には6週間の高地合宿を敢行、実業団の九電工陸上部の練習に参加し、五輪マラソン代表の赤崎晴とも走った。「走る技術など勉強になった」とランの成長に手応えを得ていた。世界シリーズの7位は、12年マドリッド大会の田山寛豪に並び、日本勢男子

【成果が出てきた】東京パラリンピックに横浜を走った。東京大会後は競技を離れて第2子を出産し、今年に入ってから本格的に練習を再開。PTS4で5位に入り「練習の成果が出てきた」と笑顔で手を口にした。東京大会後、少しずつ競技復帰への意欲が湧いてきた。パラリンピック3大会に出場した陸上からトリアスロンに転向したのも「長く競技が続けられるから」。この日は家族も沿道で応援。「長男は並走してくれたいし、次男も夫の肩車で応援してくれた。力になります」と話した。



戦いを終え、高橋に氷をかける佐藤優香(左)



最後の力を振り絞り、7位に入ったニナー賢治



観客に手を振る谷真海

2024年(令和6年) 日刊スポーツ
日刊スポーツ新聞社
東京都中央区築地3の5の10
〒104-8055 電話(03)5590-8888

高橋48位「力不足…」

ゴールした高橋栞子は「いい準備はできていたんですが」と言って肩を落とした。スイムで大きく遅れ、バイクでも苦しんだ。ランでは佐藤に抜かれて日本勢トップも譲った。「まだまだですね。スイムで遅れては、レースにならない」と、自らに言い聞かせるように話した。

東京五輪の18位から上を目指して、拠点置くポルトガルでトレーニングを積んできた。アジア大会連覇など日本女子のエースとして結果は出してきたが、日本のレースで結果を残せず「力不足。厳しい世界だな」と力なく言った。

2大会連続五輪代表になり「ホッとしました」と話した高橋。長く女子を引っ張ってきた集大成として臨む大会。「あと2カ月、今までの経験を糧に、すべてを注ぎ込みたい」と話していた。

佐藤優香トップ44位も

「チャンス逃した」

〇…女子日本選手トップも44位という成績に佐藤は、「コンディションは良かったのにチャンスを逃した」と肩を落とした。2大会ぶりの五輪出場を目指して日本女子2枠目のパリ五輪キップをつかむために上位を目指したが「スイムで出遅れたのが痛かった。1人でも多くかわそうと思ったけれど、バイク、ランで挽回できなかった」と悔しいレースを振り返っていた。

岸本が引退示唆

〇…東京五輪女子代表の岸本新菜(28)が持病の悪化を理由に引退を口にした。五輪後に左足に違和感を覚え、22年に線維化症と診断された。手術を重ねても完治せず、この日も「血液が流れず、足が上らない」と完走55分中55位の最下位。「トリアスロン好きがあふれている状態でやめざるをえないけれど、やめてもトリアスロンに関わりたい」と涙した。

小田倉 五輪内定

〇…33位という結果にも小田倉は、「次につなげると信じたい」と気持ちを切り替えて前向きに話した。スイムで出遅れ、バイクでも落車。「やめようかとも思ったけれど、日本のレースで諦められない」と声援にも後押しされてゴール。パリ五輪代表に滑り込んでの会見では「苦しいことも多かったけれど、後悔のないように準備してスタートに立ちたい」と話した。

パラ男女 佐藤「世界との差」

〇…佐藤圭一(43)は男子PTS5で8位に終わり「日本のレースで実力を出し切ろうと思っていたけれど、世界との差があった」と振り返った。冬は距離スキーとバイアスロンで4大会連続出場中、夏はトリアスロンで16年リオデジャネイロ大会に出場。射撃、スキー、スイム、バイク、ランの5刀流は「パリは厳しい。そろそろ若い世代に育ってきてほしい」と本音をもらした。

宇田ラン途中棄権

〇…表彰台を狙った男子PTS4宇田秀生(35)はランの途中で棄権。「あまり覚えていないんですよ」と言いながらも「ここで無理をしても仕方ない。レースをやめることも大切かと思う。銀メダル獲得の東京大会後は、エースとしてパラトリアスロンの普及にも貢献。パリ大会に向けて「まず出場権を獲得し、出るからには東京以上の成績を」と金メダルを自指す。

秦「楽しく」3位

〇…秦由加子(42)は女子PTS2で3位に入り「たくさんの声援の中、楽しく走れました」と笑顔で話した。リオデジャネイロと同じ6位でゴールした東京大会後に、右脚切断部の手術を決意した。長い間苦しめられてきた右脚切断部の痛みから解放されて「手術してよかった。パリでは表彰台に上がりたい」と、3大会目のパラリンピックを自指し意欲を示した。

10人のキッズ記者が取材した記事&写真を掲載

めくってね!!

【主催】横浜市、日本トリアスロン連合、横浜市スポーツ協会、日刊スポーツ新聞社
【メインパートナー】ENEOS、NTT東日本
【写真撮影】©Shugo TAKEMI/Triathlon Japan Media